

学位論文題名

老年看護学実習における教授＝学習方略の検討

－高齢者の自立を目指す「認識変容」アプローチとその効果－

学位論文内容の要旨

序章 本研究の課題意識と研究目的

重度要介護高齢者の生活する場における日常生活機能の回復に対する介入不全は、「寝たきり者」の増加を招き、実習における学生の高齢者理解の困難を強固なものにする。すなわち、重度要介護高齢者が示す現象面にとらわれ、内在する「自立」能力に気づけない学生の負の「前提」を拡大する。しかし、この負の「前提」は、実習に関わる教育での意図的な問い直しにより変容し、学びの深化を促進する可能性にも転じる。このような生きた学びの過程は、実習という状況的学習の最も優れた側面であると言える。そのため本研究では、学生が、重度要介護高齢者に潜在する「自立」能力を見出し、維持・拡大する看護実践を可能にするため、実習に関わる教授＝学習過程の方略を検討した。理論的根拠として、学習者の負の「前提」を変容させる学習論に言及するP.クラントンの「意識変容の学習」に依拠し、自律した実践者としての基礎を形成する教育＝学習的知見を明示し、老年看護学、とくに老年看護学実習（以下、実習）の実践的改善に寄与する事を目的とした。

第一章 我が国における高齢者観の変遷

老年看護学が成立した1990(平成2)年頃には高齢化率は10%を超え、在宅で高齢者介護を支える戦略が次々と生み出された状況にあった。しかしながら、社会全体で介護を支える新たな仕組みの創設とされた介護保険制度によっても、なお施設入所者は増加してきた。また、要介護高齢者に対する施策は、在宅か、施設入所かの二者択一の議論にとどまり、介護・保護される存在としての見方からは脱却できていない。このような社会的状況は、学生の成長過程の中に組み込まれ、看護専門職養成の負の「前提」の一側面となることを確認した。

第二章 老年看護学実習における課題の様相

現状における実習に関わる課題として、講義、実習展開、指導の在り方を総合的に検討している研究は管見する限り見られない。実習においては、たとえ重度要介護高齢者であっても、内在する「自立」能力を引き出し、維持・拡大できる実践能力の育成が求められている。したがって、重度要介護高齢者に内在する「自立」能力に着目する探索的な観察力と人間尊重の看護課題への志向性を兼ね備えた看護実践者の基礎を形成するための実践的知見の必要性が示された。

第三章 老年看護学実習における学習者の前提

実習において、学生が直面する困難を学生の持つ負の「前提」との関連において検討した。その結果学生は、重度要介護高齢者の現象的な問題状況にとらわれやすく、内在する「自立」能力を見出しにくいという負の「前提」を形成していると指摘できた。またこの状況は、学生が重度要介護高齢者に対し、内在する「自立」能力を維持・拡大する目標設定を困難とさせることに影響していた。

第四章 老年看護学実習に関わる学生的前提を問う教育の実際

P.クラントンによる「意識変容の学習」理論に依拠する「認識変容」アプローチの全体を示し、学生を持つ前提を、実習に関わる教授=学習過程によって問い直す教育実践を具体的に提示した。実習の前段階の講義において探索的な観察の方法、すなわち「観察強化のプログラム」が実施され、また「高齢者の自立概念」が教授された。実習の現場においては、教員によって関わり方のモデリング、日々の振り返りと問い直し、カンファレンスの実施など様々な働きかけがなされていることが示された。

第五章 高齢者の自立に焦点をあてた老年看護学実習の展開

第四章で紹介した「認識変容」アプローチの総体を実施し、その教育的効果を確認した。すなわち、学生は探索的な観察技術を駆使しながら、従来の負の「前提」を問い直し、「高齢者の自立」概念を変容させている状況が示された。しかし一方では、学生を持つ負の「前提」が、重度要介護高齢者との出会いによって強化される側面が指摘された。そのため、実習の場における教育的な働きかけや介入の必要性が示唆された。

第六章 学生の老年看護学実習における認識変容のプロセスと教授=学習過程

実習の場において強化された学生の負の「前提」を、教員が反省的思考を基盤とする意図的な関わりによって顕在化させ、変容させるプロセスを確認した。学生は、対象者に潜在する「自立」能力を覚知した上で、相互作用に基づく「実践知」を媒介として看護の可能性を把握するという二段階の認識の変容を示した。教員の意図的な関わりは、この点で、学生を二段階の認識の変容へと導き、自律的、能動的な看護者としての基礎形成を可能とする事が示された。

終章 高齢者の自立を目指す「認識変容」アプローチの効果と課題

第五章、第六章における検討結果から、「認識変容」アプローチは、看護専門職の基礎形成に有効であると確認された。中でも「観察強化のプログラム」は、重度要介護高齢者に内在する「自立」能力把握のために有用であり、学生の看護実践における「行為の中の省察(reflection in action)」を促進させた。さらに、重度要介護高齢者に関して学生の認識を変容させるには、教員の教育的な活動が深く関与している事が指摘できた。よって、「認識変容」のアプローチに基づく教授=学習過程の方略は、学生の認識の変容に基づく能動的な実践を促進し、重度要介護高齢者の潜在する能力の維持・拡大への実践的知見を提示すると結論づけることができた。

以上により、本研究において得られた知見は以下の三点に集約される。

第一に、「認識変容」アプローチの一つである「観察強化のプログラム」は、学生の「前提」を変容させ、重度要介護高齢者に内在する「自立」能力の発見を促進させたことである。重度要介護高齢者の看護には、当事者の意志や表現の総体に最大の注意が払われなければならない。学生は、重度要介護高齢者の生命活動にあらたな意味を付与し、微細な反応さえ意志の発露であると認識するに至った。その意味で、「観察強化のプログラム」は、確実に重度要介護高齢者に内在する「自立」能力に接近する手段となり得た。

第二に、「認識変容」アプローチの教授=学習過程の方略は、学生の看護実践における「行為の中の省察」を体現することが確認された。学生は、探索的な観察力を基盤とし、反省的思考を形成した。また日々の実習の場での教員による問い直し、カンファレンスを媒介とする営みが、学生の振り返りを促進し、次なる看護実践の手がかりとなった。これらは、「学生にとって「行為過程における反省」は困難である」という見解が誤りであり、学生の看護への認識を確実に進化させるものであることを示した。

第三として、教員の反省的思考に基づく指導により、学生は、実習において階層性のある二段階の認識の変容

を遂げることを明らかにした。教員の反省的思考は、看護の場の不確実な問題状況に明らかな意味を与える。そのため教員は学生に先立って、重度要介護高齢者に内在する「自立」能力に着目できる存在でなければならない。つまり、対象者の人格的尊厳と生活者としての「自立」能力がどこに潜在しているのかを見出す力を備えている必要がある。これらの教育的識見は、学生の自律的な看護実践者への変容を促進する。

本研究において、残された課題は以下である。一つは、実習指導においてファシリテーター及び省察的实践者としての側面を持つ看護教員の力量形成について深く言及できなかった点にある。今後実践に深く介入した研究を継続し、実習における教員の思考及び実践能力を様々な角度から抽出し、一般化していくことが求められていると考える。もう一つとして、「認識変容」アプローチの教授＝学習過程の効果の検討がA看護系大学1校にとどまっている事にある。よって、「認識変容」アプローチの効果を広く発信し、老年看護学における基礎教育改善の事例を蓄積していくことが、地道であるが重要な課題であると考えている。

学位論文審査の要旨

主 査 教 授 姉 崎 洋 一

副 査 教 授 木 村 純

副 査 教 授 奥 宮 暁 子 (札幌医科大学)

副 査 准教授 林 裕 子 (大学院保健科学院)

学位論文題名

老年看護学実習における教授＝学習方略の検討

－高齢者の自立を目指す「認識変容」アプローチとその効果－

(1) 論文の構成、要旨

本研究は、老年看護学実習における教授＝学習過程の方略に関する新たな学問的、教育実践的知見の提示を目的としている。そこでは、実習に参加する学生が重度要介護高齢者に潜在する「自立」能力を見だし、その維持拡大をはかる自律した実践者の基礎を形成するための気づきを明らかにすることが目指されている。本研究は、序章、第一章から第六章、終章までの八章構成からなる。

各章の要旨は、以下である。序章は、本研究の課題意識と研究目的を提示し、重度要介護高齢者の日常生活機能の回復に対する看護的介入に関して学生が実践的に認識するための学びが明らかにされる。学生の実習前のとらわれた「前提」を崩し、要介護高齢者の内在的能力をいかに把握し関わるかの教授＝学習方略仮説がここでは明らかとされる。本研究では、学生の実習に関わる教授＝学習過程の方略の理論的根拠としてP.クラントンの「意識変容の学習」が採用されている。第一章は、我が国における高齢者観の変遷が論述されている。第二章は、老年看護学実習における課題の様相が明示されている。第三章は、老年看護学実習における学習者の前提を分析している。第四章は、老年看護学実習に関わる学生的前提を問う教育の実際を分析している。第五章は、高齢者の自立に焦点をあてた老年看護学実習の展開とその教育的効果を確認している。第六章は、学生の老年看護学実習における認識変容のプロセスと教授＝学習過程を分析している。終章は、高齢者の自立を目指す「認識変容」アプローチの効果と課題を理論的に概括している。

(2) 研究の意義

本研究の意義はおおよそ、以下の三点に要約される。

第一は、学的貢献である。老年看護学は、その成立が1990年とされ、老年看護学実習は1997年に独立して掲げられるなど後発学である。介護保険制度の導入による施設入所者の増大、高齢人口の増大の中で、従前の疾病看護が病院での病状治癒を目的としたのに対し

て、病状の好転が困難な高齢者に対して、介護療養型医療施設、老人福祉施設、在宅高齢者など多様な場においてその日常生活機能の維持・回復を目的とする看護であることに特徴がある。とりわけ、重度要介護高齢者に内在する能力の本質的改善をめざす看護は、個別かつ多変数的要因をもつ高齢者の特性故に、未解明な要素も多く学際的協働研究を必要としてきた。本研究は、重度要介護高齢者を対象として、高齢者の「自立」概念把握をより豊かにふくらませ、老年看護学実習における教授＝学習過程の方略に新たな知見を提示し、老年看護学への功績を示した。

第二は、老年看護学実習の目的を看護基礎教育における重度要介護高齢者に内在する「自立」能力に着目できる探索的な観察力と課題の志向性を兼ね備えた実践者の基礎を形成することにおき、看護専門職養成の基礎的教育の改善に多くの知見を示したことである。老年看護学実習という状況的学習において、看護学生の高齢者認識の「前提」を崩し、看護に向かう新たな「前提」を形成する指導のあり方において、探索的観察、高齢者の自立把握、関わりモデリング、日々の振り返りと問い直し、カンファレンスの実施などの「観察化のプログラム」は、有用な実践的知見を提示した。

第三は、老年看護学実習において、P. クラントンによる「意識変容の学習」理論に依拠する「認識変容」アプローチを実践し、学生の看護実習の「前提」を問い直し、その教育的効果を検証したことである。学生は、重度要介護高齢者との出会いによって、探索的な観察を深化させて、自身が抱く高齢者の自立概念を変容させた。同時に、実習によって強化された負の「前提」に対しては、教員の意図的な関わりによって変容を促し、学生に対して対象者に潜在する「自立」能力の覚知と、対象者との相互作用に基づく看護実践知の二段階の認識の変容をもたらした。実習中における「行為の中の省察 (reflection-in-action)」の体現がもたらされた。

(3) 結論

本研究は、要するに、一つは、老年看護学で介護を学ばせる場合が多いなかで、高齢者の潜在的「自立」能力の認識を実習の学習目的に設定したことで独創的である。二つには、看護学領域全般における臨床実習における教育＝学習方略に関する研究としては、「対象の理解」「看護技術」に関する学生の学び、教育者の困難さなどの研究が多い中で、実習でどのように学ばせるかに関する研究として先駆的である。これまでの看護観察は、「疾病」から起こる生体の反応観察学習が中心であった。しかし、本研究は、高齢者が生活するために必要な生体機能を観察する技法学習であり、今後の看護実践者育成の重要な示唆を与える研究といえる。

なお、この学習方略には、教育者は、学習者のレディネス状況を見極める教育的実践能力が必要であり、特に臨床実習という再現性のない場面での、学生の気づきを導き出す教員の働きかけや患者、指導者、学生の相互関係性の研究が深められる必要がある。今後の課題である。しかし、そのことがこの研究の価値を損ねるものではない。

以上の点において、本論文は、北海道大学博士（教育学）の学位の授与にふさわしいと本審査委員会は、全員一致して判断した。